

仁王の湯 不動の湯

諸木

絵：野口宣友

その昔、清水寺（安来市）の山門の右側に立つ仁王さんと左側に立つ不動さんは一緒の家に住んでおりました。ところが、不動さんは大の夜遊び好きで、夜毎遅く帰っては、寝ている仁王さんの枕元でゴトゴトと音を立てます。うるさくてかなわんと仁王さんは「ひとつ不動のやつに仕置きをしてやらんといけん！」と考えました。

何も知らない不動さんが、その夜もいそいそと夜遊びに出かけると、仁王さんは家の戸を閉め、戸張をしてしまいました。不動さん

がいつものように夜遅く帰ってみると、戸が開きません。不動さんは「おう！仁王さん、戸を開けてごっさい。今戻ったけん」と大きな声を出しますが、仁王さんは寝たふりをしてやうやう「おめ、腹を立てた不動さんは自慢の力で「戸の一枚や二枚、開けてやる！」と、戸に手をかけて「うん！」と緊張しました。



すると「ブイー、ポン！」と一つ大きなおならが出ました。寝たふりをしていた仁王さんも思わず起き上がって「不動、くさい！」

と言うと、不動さんは「おう、におう（仁王）たか」と応えましたが。それ以来、どうにも一緒にいるのは面白くない、と二人は話し合って門の両側に別れて立つようになったというのです。

ある年の始め、仁王さんがその年の恵方となる土地を決める「恵方定め」のため、手にした金剛杖を倒して占うと、南部地方の村に向かって倒れました。仁王さんが「南無！」と手をあわせて唱えると、この村に温泉が沸き出て、この湯によって村は「諸湯」と呼ばれるようになったそうです。

「諸湯」は、温泉が滾々と湧き出て、冬でも雪が積もらない源泉の里になりました。その頃、諸湯の外れに大きな地藏さんがあったそうです。実はこの地藏さん、明るくところよい村人たちのために「うるおいのある村」にしてやろうと、仁王さんに村が恵方となるようにお願いをして、この地を温泉にしてもらったのです。

ある夜、身の丈6尺もある6人の大男が諸湯の地藏さんを担ぎ、大八車に乗せて持ち去ってしまい

ました。どうやら、不動さんの「恵方定め」で金棒を倒して占ったところ、「諸湯の地藏さんを持ち帰ると吉兆あり」というお告げがあり、6人の男たちが地藏さんを持ち去ってしまったのです。

男たちは持ち帰った地藏さんをドカンと里に立てかけました。ある時、傷を負った白鷺が地藏さんの足元に飛び降りました。すると、地藏さんの足元に暖かい湯が滾々と湧き出てきました。白鷺がその湯につかると、身体の傷がきれいに治り、遠くの空へと飛び去っていきました。これによって、この湯は「鷺の湯温泉」（現在の島根県安来市広瀬町）と呼ばれるようになった。

しかし、地藏さんが持ち去られたことで、「諸湯」の温泉は涸れてしまいました。その後、諸湯がなまって「諸木」という地名になったというのです。

聞くところによると、地藏さんを持ち去った6人の大男は、清水寺の六地藏さんであったということです。

おしまい